

his son, Daan Mogot, is now immortalized in an important street-name in Jakarta as one of the early fallen heroes in the Indonesian War of Independence.

The Minahasa elections of 1948 was the first when adult women were allowed to vote, but only two female members had a seat among an overwhelmingly male council: one was a government appointee while the elected member joined the pro-Republican Barisan Nasional Indonesia.

In April 1950 the Council voted for integration with the Republic of Indonesia. At the time there was only one member representing Twapro who understandably was the only one who opposed integration while three abstained. His following soon dwindled in numbers, and when he died a few years later none of his supporters dared to comply with his wish that his coffin be covered with the Dutch flag. Only his political opponents, members of Barisan Nasional Indonesia, paid homage to this staunch supporter of The Netherlands by burying him under the shelter of the Dutch tricolor. It was thus a symbolic funeral of a naive dream: naive, because no sensible Dutch government at the time would ever think of according to Minahasa a special status within their kingdom, and certainly not as a 12th province.

(Adrian B. Lapien • Faculty of Letters,
University of Indonesia)

Christian Pelras. *The Bugis. The Peoples of South-East Asia and the Pacific.* Oxford: Blackwell, 1996, xviii + 386 p.

考古学者の P. Bellwood と I. Glover が編集をしている「東南アジア・太平洋の人々」というシリーズの1巻として、待望のブギス人の総括的な書物が刊行された。

このシリーズは、1993年以來『ボルネオの人々』『クメール人』『バリ人』『ラピタの人々』が出版され、『メラネシア人』『マオリ人』『マレー人』『フィ

ジー人』『小スンダ列島の人々』も刊行が予定されている。いずれも必ずしも明らかではない民族史の総観の形をとっていながら、基本的な民族誌的情報を盛り込んでいるところに特色がある。執筆者も民族学者、歴史学者、考古学者と多岐にわたっている。

本書の著者クリスチャン・ペルラスはソルボンヌ出のフランス人であるが、1968年にマレーシア・ジョホール州のブギス移民コミュニティの調査からスタートして、一貫してブギス人の社会構造、世界観、宗教、歴史、生業などを研究してきている。まとまった著書がなかったので、その成果を集大成する期待は高かった。ペルラスは1978年から2年間ウジュンパンダンにあるハサヌッディン大学に付置されたフォード財団支援の社会科学訓練所の指導の任にマトウラダ教授とともに当たり、水準の高い研究成果を訓練生の中から生み出している。アメリカ、イギリスの人類学者（例えば Jacqueline Lineton, Susan B. Millar, Shelly Errington, Greg Acciaioli, Kathryn Robinson）が一地点での通年定着調査を志向しているのに対し、ペルラスは広域にわたって息の長い調査活動を続けてきた。それだけに従来にない包括的なブギスの民族史を集大成することができたといえる。刊行されているシリーズの中では、バランスのとれた秀逸な1巻といえる。

本書は2部に別れる。第1部はブギス人の起源から17～18世紀の古典時代までを扱う。第2部は社会と文化と題されて、古典時代のモデルが伝統として残っている面と、その変容とを取り扱い、より民族誌的な関心から書かれている。

第1部の第2章は利用できる資料を概観している。考古学遺跡も遺物も限られており、また文献資料も14世紀以降に限られているという制約の中で、四万年前とも言われる剝片石器文化以来の歴史をどのように捉えるかというのはまだまだ議論が煮詰まっていない。ペルラスは第3章でプロト・ブギス先史期を、比較言語学および民族誌からの類推に基づいて再構成する。ボルネオのタマニック人（エンバロ、タマン、カリス、パリン）と南スラウェシ諸語との類縁性（K. A. Adelaar の説）に基づいて、両者の原住地を東ボルネオに求める。そこからタマニック・グループは西の内陸へ移住し、プロト・南スラウェシ・グループは海を渡って、サッダン川河口を

その拠点としたという仮説を立てる。混血を認めながらも、いわば白い血を持つ海岸部の交易者と土着の赤い血の人からなる二重構造説をとる。当時はまだシデンレン・テンペ両湖を通る海峡が南スラウェシ半島を分断していた。したがって、サッダン河口は、森林産物、鉄・金などの鉱物資源を得るための戦略地点であるばかりでなく、ボネ湾への通路口にも当たっていた。

この移住集団は、時と共に、マカッサル人、マンダラ人、トラジャ人と別れていくが、同時に、土着のオーストロネシア語系の先住民と混交していった。先住民は、移住者の言語を吸収すると共に、織物、鉄鍛冶、宗教観念を取り入れ、新しい混合文化を形成していった。上述したように、先史時代にすでに社会は交易を制御する支配的な貴族階級と土着の人とのはっきりとした階層があったとする。

先史時代と歴史時代をつなぐものとして、ガリゴ譚と呼ばれる長大な叙事詩群の示唆する時代がある。この時代を第2期の時代区分としてラ・ガリゴ時代と名付け、第4章早期文明の章を当てる。ガリゴ譚は基本的には天孫が人間界に降臨して織りなす物語であり、最終的には神々は天上と地下界とに去っていき、醜い争いを繰り返す人間が残されることになる。おそらくこのガリゴ譚をどのように解釈するかがブギス民族史論の分かれ目となる。ペルラスは、11世紀から13世紀をこのガリゴ時代に比定し、プロト・ブギス時代の早期金属期時代(第1期)とも、次の時代の大小の王国が形成される封建社会(第3期)とも違って、ルウ、チナ、ソッペンなどの地方政治統一体を生み出したという。

14世紀以降は、ブギスの王国年代記を、ジャワのナガラクルタガマ、マラカのスジャラ・ムラユを始めとしてポルトガル、中国などの外部資料と比定することにより絶対年代を得ることができ、また17世紀以降は西洋資料が増えるので、通常はこの時代から歴史叙述は始まる。問題はこの土着の年代記の描く王統史が必ずしもガリゴ譚と直接結びつかないことであろう。

第3期(14世紀後半から16世紀末まで)はオランダ植民地時代まで続く王国の形成期である。第5章をこれに当てる。南スラウェシの地形が現在の形に近づき、人口増加、稲作農業の技術革新、居住地

の拡大と共に、領主、家臣、被統治者の契約関係に基づいた封建システムが確立した。上層貴族間は領国を越えた通婚関係を結びネットワークを広げたが、同時に王国間の覇権争いもこの時代を特色づけるものである。国家形成にインド的な影響がなかったということ、そして都市を作らなかったことが、ブギスの特色であるという指摘は大切である。

第6章は、1600年ごろから1669年までの第4期と、それ以降18世紀に至る第5期とを扱う。17世紀初頭からイスラームが支配階層に受け入れられていく。マカッサルのゴア・タロ王国とそれに対抗するブギスのボネ王国とが相争った時代であり、マカッサル、ブギス、マンダラの船団が群島を席捲し出す。しかし、オランダがボネと組んでマカッサルを占領する1669年を境に、南スラウェシは王国間の覇権争いが少なくなり、比較的安定した時代を迎える。この第5期をブギスの古典時代とする。文芸活動が盛んになり、イスラームが浸透し、商人中間階層が力を伸ばし、海洋交易ネットワークが確立されていく。

古典期以降は、19世紀(1810-1906)の前植民地時代(第6期)、1906年から49年までの植民地時代(1907-1941, 1942-1945, 1945-1950に細分される)(第7期)、それ以降(1950-1965, 1965-)現代までを第8期とする。第6期は、オランダの圧力が徐々に伸びていき、南スラウェシのみならずスマトラ、マレー半島などの移民先でも商品作物が植えつけられ、世界経済の波に巻き込まれながら、イスラーム志向の商人階層がますます重要性を増していったとする。第7期はオランダが間接統治によって植民地支配を強化した時代と日本軍占領期、独立戦争期をもその中に含めている。

近代とも言えるこれらの時期を第10章でまとめて記述し、第2部の7章から9章は主として19世紀後半の記録によりながら、「伝統」的なブギスの社会文化について処々に深い洞察を加えながら再構成する。社会(第7章)は、親族組織、社会階層、支配関係、パトロン-クライアント関係などブギスの特色を浮き彫りにする。宗教、精神生活を概括した第8章は、価値観、規範などにも筆が及んでいる。第9章は物質文化と経済活動である。衣食住、農業、漁業・養殖業、織物産業、鍛冶、船舶、運輸、航海術

などを手際よくまとめている。

このような歴史の流れを動かしているブギスの原動力をペルラスはブギス・アイデンティティに求めているようである。インドネシア国民として、あるいはマレーシア、サバ、シンガポールの一員となっても、ブギスとしてのアイデンティティはより強くなってきているという。最後に著者がまとめているのに従えば、その特徴は三つになる。第1は、どこにいても、どんな時でも、最高の経済的チャンスを求める性向である。第2は、周囲の状況に旨く適応していく能力が上げられる。第3は、相反する価値の場合に応じて使い分けるといことである。厳格な社会階層制度の中にあっても平等主義が生きている。極端に競争主義であると共に、時には妥協をもつばらとする。個人の名誉を重んじると共に、ブギス人としての紐帯に生きる。あるいは、勇気、巧妙さ、篤心、商人根性といった性格を評価する。

これらは大旨納得できるブギス人の性格であるが、果たしてこれらがブギスにだけに見られるものなのか、本当に歴史の原動力であったのかは更に検証されねばならない。とくに1、2の性格は、海域世界に特有の、あるいは移動によって場所を変えること(displacement)によって生まれてくる特徴とも考えられる。いわばディアスポラ、コミュニタスという第3の時空間が契機となって引き出す特徴かもしれない。ブギス人に生得的な固有な動機と見るよりは、風土によって生まれてくる、彼の言うインシュリンディアに普遍的な、エコ・アイデンティティの一部という風に私は解釈したい。第3の相反する価値の共存という点は、確かに従来のブギス論が、社会階層意識が強い、競争的である、名誉のためには死をもいとわないといった一方的な価値観のみを強調していたのを矯正する上で貴重な指摘ではある。しかし、この指摘がブギスを理解するのに有効なためには、矛盾する価値の生活場面に応じたバランスあるいは相互関係のあり方が取り上げられなければ問題は明らかにならないのは当然であろう。

このように歴史を動かす力をアイデンティティと見るのは一種の還元主義となろう。しかし、歴史に仮託したアイデンティティ論としては大変面白い。民族学者、人類学者の歴史学へのひとつの貢献であるのには間違いない。この意味で、結論として時代

区分が提示されているのは象徴的である。民族学者がブギス人の通史を読み取ると、その社会文化の変化を8つの時代として解読し得るといことに外ならない。

謎の部分が多いブギス民族史を現在入手し得る最新のデータを駆使して、一応スタンダードな通史としたことは、今後のブギス研究に益するところ大であろう。ペルラス自身は17世紀以前の社会文化についての書物を別途準備中であるという。本書は資料も広く渉猟しており、古川久雄、高谷好一、田中耕司などの農業に関する結論をそのまま引用しているのも好感がもてる。

細かいことを言えば、マラヤ(Malaya)と同じようにマラカ(Malaka)、マラユ(Malayu)として、eを使わずにaをもって表記していることが目についた。また文献リストに含まれていない資料が数点引用されている。インデックスは、中項目主義というか独特のスタイルを取っている。知識を整理して学ぶのには良いが、事典的に不明な語彙、あるいはブギスについてのキーワードを直接チェックするという目的には添わない印象を受ける。ブギス語のエントリーもビッサ、ラ・ガリゴと地名以外は項目に掲げられていない。語彙集は別に作ってもよかったのではないかと思われる。

(立本成文・東南研)

Patricio N. Abinales, ed. *The Revolution Falters: The Left in Philippine Politics after 1986*. Ithaca, New York: Southeast Asia Program Publications, Southeast Asia Program, Cornell University, 1996, 182 p.

旧来のフィリピン共産党(PKP)に対し、「ソ連現代修正主義」の下で「冒険主義的」、「機会主義的」過ちを起こしてきたと批判を行い、新たに毛沢東主義を基本として1968年に活動を開始したフィリピン共産党(CPP)は、農村ベースの武力闘争(持久的人民戦争)を基本戦略にすえ、70年代、80年代に急速に勢力を拡大してきた。そして、最盛期であるマルコス政権崩壊直後の87年には、2万5,000人のゲリラを擁するまでに至った。しかし、このCPPも90年代に入って深刻な党内対立を経験し、急速に衰退